岩手県立大学看護学部紀要 17：37 － 42，2015
Journal of the Faculty of Nursing，Iwate Prefectural University

■そ の 他■＜実践報告＞

岩手県内の助産師を対象とした「助産実践能力強化研修」の取組み

野口恭子，福島裕子，蛎崎奈津子，アンガホッファ司寿子，
金谷掌子，後藤仁子，木地谷祐子，大谷良子

The implement of strengthening the capacity for midwifery practice for midwives in Iwate

Kyoko Noguchi，Yuko Fukushima，Natsuko Kakizaki，
Shizuko Angerhofer，Shoko Kaneya，Satoko Goto，
Yuko Kichiya，Yoshiko Ohtani

キーワード：助産師，助産実践能力強化，助産師の専門性
Keywords：midwife, strengthening the capacity for midwifery practice, profession of midwifery

Ⅰ．はじめに

産婦人科医師不足による出産場所の減少や集約化による産科医療の質の地域格差が全国的に問題となり，岩手県においても助産外来や院内助産システムを取り入れ，助産師の専門性を活用する取組みが始まっている．助産師が助産外来や院内助産システムで自立／自律して助産診断・助産ケアを行うためには，助産師自身の経験で培ってきた実践能力だけでなく，その能力をさらに強化するための教育・研修システムが重要となる[1)]．近年は助産外来や院内助産に取り組む施設も増え，助産診断やケアができる中堅以上の助産師の活躍が期待され，モデル研修等も実施されている[2)]．

岩手県ではこれまでも助産師を対象とした様々な研修会が実施されているが，助産師個人が研修で新たな知識や技術を学び，意欲を持って職場に戻った後，臨床での実践に研修での学びを還元することが困難な側面もあった．助産師の自律性を高めるためには，周産期ケアに対する前向きな姿勢や意欲，積極性，創意工夫が行える者へと支援し，仕事に対する意欲や自信を伸ばしていくことが必要とされている[3)]．

そこで，各自が働く現場の助産師専門性発揮と課題解決に向けた主体的実践能力を獲得し，安心で安全な妊娠・出産・育児を支える体制整備にも貢献できる能力を強化するために「助産実践能力強化研修」を企画・実施した．

Ⅱ．研修の目的

本研修は，一定の実践経験を持つ岩手県内の助産師を対象に派遣型・実践型の研修を行い，助産師個人の助産ケア能力の向上のみならず，研修を受ける助産師が勤務する周産期医療現場へ研修の学びを還元し，課題解決を目指すものである．

具体的な研修目標は以下の６点とした．

1．自分の働く現場の助産師の専門性発揮に向けた課題解決やニーズ充足のために，他施設の研修で得るべきものを明確化できる．
2．研修で院外･県外の助産師の実践に触れ，助産師としての専門スキルや知識等を実践的・経験的に学び，知見を広げることができる．
3．研修で得られた実践的・経験的な学びから，自分の働く現場の課題解決やニーズ充足のための具体的方策を明確にできる．

受付日：平成 26 年 9 月 16 日　受理日：平成 26 年 11 月 26 日
岩手県立大学看護学部　Faculty of Nursing，Iwate Prefectural University

4．研修成果を実践現場に還元・活用・実施し，他職種も巻き込んだ課題解決やニーズ充足に取り組むことができる．
5．一定期間の実践内容を評価し，今後の課題を明確化できる．
6．研修プロセスを通し，助産師としての視野を広げ，主体的実践能力や自信を獲得する．

Ⅲ．研修の対象

本研修の対象は，産科領域における勤務経験が５年以上の助産師で，研修目的を明確に持ち，指定された日数の研修を受講可能な者とした．実践現場への学びの還元を見据えた研修であることから，病院や診療所勤務の助産師の場合は，施設からの推薦書を求めた．

なお，産科領域での勤務経験が５年以上の中堅助産師を対象とした理由は，助産師としての一定期間以上の経験を持つ者は，基本的な助産実践能力を有しているとともに，職場における実践や後進指導の主力となり，研修の学びを実践場所に還元しやすいと想定されるためである．

Ⅳ．研修の実際

本研修の特徴は，受講者が職場の課題を踏まえて自らの研修目的を明確にした後，本人の希望する県内外の施設で個々の目的に沿って実践型研修を行い，その学びの職場還元まで継続して実施するところにある．

研修申込書作成段階で目的設定が始まり，受講決定後に研修受講者全員が集合する「結団式」で研修目的を明確にして施設研修に赴き，施設研修後に１～２か月の間隔で２回開催する報告会に参加する延べ６か月にわたる研修である．

平成22年度「岩手県型の助産師活用による安心・安全な出産・育児支援体制整備事業－在宅助産師等活動支援事業」の助成を受けて研修を開始し，平成23年度・24年度は岩手県立大学看護実践研究センターの助成を受けて開催した．これまでに研修を３回開催し，修了者は25名である．施設研修を実施した施設は総合周産期母子医療センター２か所，助産所３か所であり，３年間の受講者は総合周産期母子医療センター，助産所での研修がほぼ同数であった（表１）．

具体的な研修の概要を研修申込から報告会までの一連の流れにそって順に述べる．

１）研修申込

受講希望者は職場における課題も含めた自らの研修目的を設定し，研修希望施設で何をどのように学び，どのように職場に還元したいかを具体的に記載し，職場の上司による推薦書を添えて申込となる．

２）結団式

受講者の希望した研修施設への派遣研修前に研修目的を明確にし，研修生相互の目的を共有し，研修の動機を高めるために結団式を実施した．自律／自立した実践をイメージし研修動機を高めることを意図し，平成22年度は「バースセンター開設への取組み」について栃木県済生会宇都宮病院　小野口浩美氏のご講演，平成23年度以降は，前年度研修受講者に自らの経験した研修内容，研修の学びをその後どのように所属施設に還元したかを語っていただいた．前年度受講者が研修に赴いた際の写真等の提示や，研修中に必要な物や研修先での学びのコーディネートの工夫など実践知から得られた情報も多く伝達された．

講演後は研修施設ごとに小グループとなり，

表１　実施年度別　研修施設と受講者数

実施年度	人数	恩賜財団 愛育病院 （東京都）	日本赤十字社 医療センター （東京都）	とも子 助産院 （宮城県）	矢島 助産院 （東京都）	遠野市 助産院 （岩手県）
平成 22	12	2	3	3	3	1
平成 23	8	2	2	2	2	0
平成 24	5	1	2	2	0	0
計	25	5	7	7	5	1

各自の研修目的や課題を共有し，施設研修に向けて目的のさらなる明確化を図った．平成23年度以降は，前年度受講者もグループワークに加わり詳細な情報提供や質疑応答が行われた．

３）施設での研修

10月から11月中旬に，受講者は希望する施設一箇所に赴き，受け入れ先のコーディネートにより，各自の計画に基づいた研修を実施した．平成22年度は研修にかかる旅費を支給したが，平成23年度以降は受講者の自己負担となった．

４）第１回報告会

研修終了後の12月に第1回報告会を実施した．各自の研修の内容，研修の学びや気づき，今後職場に還元していくにあたっての抱負，計画などを発表していただいた．なお，発表資料の作成，発表方法等，研修生が自発的かつ主体的に取り組むことを促進する姿勢ですすめた．

同施設で研修した場合でも受講者により研修内容や学びの視点が異なり，貴重な共有の場となっていた．また，自らの職場と研修施設での実践を比較し，共通する部分からは助産ケアとして重要な要素を再認識し，異なる部分からは自施設における課題の解決やよりよい助産ケアへの可能性を得たことが報告された．

受講者は臨床経験５年以上の中堅助産師であり，通常は新人看護職や実習学生に説明や指導をする立場であるが，研修では，他施設の助産師から説明や指導を受けるという逆の立場を経験した．研修生として快く迎えられ，惜しみなく丁寧に説明される経験や職場で活き活きと実践をしている助産師の姿勢に触れることが新たな気づきや助産師として良き実践をしたい気持ちが高まったことが報告された．職場への還元については，研修終了後に早々に取り組んだ助産師も多く，職場の医師や看護職を対象に伝達講習を行った例も報告された．

５）第２回報告会

第１回報告会から約２か月経過した翌年２月に第２回報告会を開催した．研修での学びの職場への還元状況，今後の課題を各自から報告してもらった．職場への還元状況は，研修終了後に職場で報告会を実施した者，具体的な改善に向けた取り組みに着手している者，産科以外の部署に配属され職務として助産実践ができず職場への学びの還元が困難な状況にある者と様々であった．研修直後は助産ケアの改善の意欲が高かったものの，月日の経過とともにモチベーションが下がることや，一人ではできない困難があることも報告された．学びを職場に還元していく活動の中で，医師や助産師を含めたスタッフ間での意思統一に課題を感じている研修生が多く，地道な活動が必要であること，性急に大きな成果を求めるのではなく日々出来ることから取り組んでいくことの大切さが語られた．一方，研修報告会を実施して病棟スタッフや他職種と連携できたり，これまでに研修受講した助産師が職場にいる場合は，協力して順調に課題解決が進んでいる状況も報告された．

報告後のグループワークでは，他の受講生の職場での還元の状況を聞いて自分の課題も確認することができた，受講生同士でパワーをもらった，という肯定的な言葉が聞かれた．受講者が一同に会して話し合うことで，今後の課題が明確になり実践に向けたヒントを得て，力づけられ，励まされている様子がみられた．

また，前年度の受講生からアドバイスをもらったように自分たちも来年度はアドバイスができるようになりたいという抱負や，一人の助産師としてだけではなく，岩手の助産師としてどうあるべきかを考える機会になったという意見もあった．

なお，各報告会では各自の研修目的の到達度（４段階）と研修に対する感想や意見を書いてもらった．

Ⅴ．研修の効果と考察

研修の効果を，結団式，第１回報告会，第２回報告会において口頭で述べられたグループワークの報告や感想，研修目的への到達度自己評価から考察する．受講生にとって良かった点を表２，困ったことについてを表３，研修の到達度自己評価を表４に示す．

研修が受講者にとって良かった点については，表２に示すように結団式では，研修目的が明確になったこと，同じ施設で研修する者同士の交流，前年度研修生からの情報が役立っていた．施設研修では「研修受け入れ先の対応がとても良かった」「専門性を発揮して活き活きと実践している助産師の姿に触れて勉強になった」「今までの助産ケアを振り返る機会となった」「自分たちが実施して楽しい，やりがいがあるケアを実践していきたいと思った」など，研修先の受け入れ対応の良さと研修先の助産師との出会いを通して，助産師としての自分を見

つめる機会となっていたことがうかがえた．

研修で大変だったこと困ったこととしては，表３に示すように，施設研修日程の確保や経済的負担，職場への還元の困難があげられた．研修の到達度についての自己評価は，施設研修から１～２か月後の第1回報告会時点では，全員が「到達できた」「やや到達できた」と評価しているが，第２回報告会時には，「到達できた」という評価は無く，「あまり達成できなかった」という評価がみられた．このことは，施設研修に対する目標が達成されても職場への還元は困難であったことが反映したためと考える．

「研修直後は自らの職場でもやってみたい等の気持ちが高まっていたが，職場スタッフの理解を思うように得られなかったり，日々の業務に圧倒されて研修で受けた感動が薄れていった」と多数の受講者が語り，「報告会は心理的負担だったが，研修仲間に会って頑張ろうという気持ちになれた」「話をしたら，やる気が湧いてきた」という発言もあった．これらの発言から研修によって鼓舞された助産実践へのモチベーションは時間の経過とともに低下する傾向があり，約２か月毎に２回実施する報告会は，課題解決や実践改善のモチベーション維持にも有効であったと推察できる．

研修での学びを職場の実践に還元していくには時間を要するが，他のスタッフに理解してもらう方策や他職種との連携について工夫を積み重ねることで可能となり，複数年にわたって研修受講者のいる職場では，還元への取組みを継続するモチベーションを維持しやすい様子であった．

岩手県の中堅助産師を対象とした派遣型・実践型の研修は，４～６日間の期間に先駆的な実

表２　受講生にとって、研修の進め方や施設研修で良かった点

研修前の結団式

・同じ施設に行く助産師との話を通して研修先で何を見てくるかという視点がクリアになった
・誰がどの施設へ研修に行くかを知る事ができ，研修後に情報交換ができた
・前年度の研修生のアドバイスがとても役に立った
・前年度の研修生との交流で情報を得ていたので，イメージしやすく，研修に入りやすかった

施設研修

・見学したいことややりたいことなど，自由に研修させていただけた
・研修先のスタッフが研修生を受け入れてくれているという感じがして研修しやすかった
・研修担当者，スタッフ，管理者の方々等みなさんがとても親切で，安心して研修が行えた
・受け入れ先の対応がとてもよかった
・専門性を発揮して活き活きと活動する助産師に接することができた
・研修を通して自施設で行われている助産ケアやシステムを見直す機会になった
・助産師の力を最大限に発揮している姿に触れることができて勉強になった
・交通費が支給されたこともよかった

報告会

・他の研修先の情報や施設の現状を知ることができた
・同じ課題を抱えているスタッフたちと意見交換ができ，一緒に考えることができた
・助産師同士が集まり，情報や課題を共有することが非常に有意義だった
・他の受講者の報告を受け，自施設でも取り入れたいと思った
・県内の他施設の同年代助産師との交流を持てた

践をしている助産師から具体的な助産ケアを学ぶとともに，助産師としての自分を振り返る機会にもなっていた．先駆的な実践を行う施設での研修を効果的に行い，日々の実践に学びを還元しやすくするために，研修目的をより明確にする施設研修前の受講者のグループワークや施設研修後に研修内容を報告・共有する施設研修後の報告会・グループワークの実施は有効であったと考える．

また，研修受講者が複数回顔をあわせ，助産ケアの向上という共通の目的のもとに情報共有し，一緒に考える機会は，研修における知識・技術の習得だけでなく，助産師同士の横のつながりを強める効果もあった．さらに，前年度研修生も一緒に語り合うことは，研修での学びを職場へ還元する取組みを継続する意欲を高める一助となっていた．研修生の多くは，研修先で多くの助産師と出会ったことや，研修に参加している他施設の助産師との交流やディスカッションを通して，自分自身の実践を振り返る機

表３　大変だったこと困ったこと

施設研修に関して

・職場における研修日程の確保や勤務調整の難しさ，研修期間の短さ，滞在費の負担
・研修生の立場として妊産婦にどこまで手をかけてよいか戸惑った
・複数の研修生で研修に行けると，研修先での気付きも深まるのではないか

研修での学びの職場への還元について

・日々の業務の中で研修成果を還元していくことが難しい
・スタッフに伝えていく時間がとれず，職場への還元に時間を要する
・研修の学びを，これから現場に還元するという課題が荷が重い
・還元するための取り組み期間が短かった
・課題が多く，一度では解決できなかった
・職場に自分以外にも研修を受ける助産師がいれば，モチベーションも維持でき実践につなげやすい

表４　受講者の研修目的の到達度自己評価

受講年度	受講者数	報告会	回答数	到達できた	やや到達できた	あまり達成できなかった
平成 22	12	第１回	11	3	7	0
		第２回	9	0	9	0
平成 23	8	第１回	6	3	3	0
		第２回	6	0	3	3
平成 24	5	第１回	4	2	2	0
		第２回	4	0	2	2
計	25	第１回	21	8	12	0
		第２回	19	0	14	5

会となったと話すなど，本研修が研修生の看護観・助産観を広げる機会となっていることがうかがえた．

産科医療施設の集約化が進む岩手県において，「助産師としての役割は何か」，「助産師としてできることは何か」を施設や勤務経験年数の壁を超えて，話し合う機会は貴重であり，本研修を通して岩手県内助産師の「つながり」を支援する意義は大きいと考える．

Ⅵ．今後の課題

研修の企画・実施を振り返り，受講者の発言や状況から企画意図がある程度達成されている感触を得ることができた．派遣型・実践型の研修が主体性を育みモチベーションを向上させることや複数回に渡って継続した研修により施設を超えた助産師同士のつながりが形成され，より良い実践へのモチベーション維持にも役立っていた．一方，学ぶ意識やケア改善の実践を可能とする職場環境の構築には，課題が大きいことが示唆された．

岩手県では集約化により分娩取扱可能な医療機関が減少し，有床助産所もないため，助産師が主体的に自立／自律して仕事ができる場面が少ないと思い込みやすい．また，県土が広いため施設を超えて助産師が意見交換できる場も少ない．そのため，助産実践能力を高めるには現状の課題を明確にしつつ自ら学び続ける姿勢を維持し，他者との連携・協力で課題解決する方法を学ぶことが必須となり，知識の理解や技術の習得だけではない専門職としての誇りや自負を涵養することも今後の研修のあり方として重要な側面と考える．さらに，職場側への組織的働きかけや行政の協力も視野に入れた研修企画が必要と思われる．

今後の研修がより実践に反映できるものとなるために，今回得られた示唆をもとに研修に対する受講者への調査を実施し，研修効果をさらに詳しく分析・評価したいと考える．

引用・参考文献

1）福島裕子，齋藤益子：助産師の実践能力強化（エキスパート助産師認定研修）モデル研修，遠藤俊子他編著：院内助産システムガイドブック，107-117，医歯薬出版株式会社，2010

2）齋藤益子、福島裕子他：助産実践能力強化研修プログラム案の作成のためのモデル研修実施報告，厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業　地域における周産期医療システムの充実と医療資源の適性配置に関する研究，平成21年度総括・分担研究報告書，49-61，2010

3）望月千夏子，湯舟邦子他：助産師の自律性―仕事に取り組む意識との関係―，日本ウーマンズヘルス学会誌，7，157-164，2008